Osaka University Knowledge Archive

Title	<図書紹介>起伏ある生涯の記録 大久保美春『フランク・ロイド・ライト 建築は自然への捧げ物』
Author(s)	並木, 誠士
Citation	デザイン理論. 2009, 54, p. 74-74
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53577
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

起伏ある生涯の記録
大久保美春『フランク・ロイド・ライト ── 建築は自然への捧げ物』
ミネルヴァ日本評伝選　ミネルヴァ書房　2008年

並木誠士／京都工芸繊維大学

本書は，「日本評伝選」というシリーズの一冊である。そのため，フランク・ロイド・ライトというアメリカ人建築家をあつかうと言っても，おのずから，それは日本とのかかわりで語られることになる。たしかに，ライトは日本を訪れており，その建築は，日本国内にも現存している。しかし，それ以上に，ライトがこのシリーズに加えられたのは，ライト自身が日本美術のコレクターであり，その建築が日本美術からの影響を受けていると言われているという理由からである。実際に，ライトは浮世絵を日本で購入してはアメリカで売っており，また，設計した建物内には屏風をはじめとした日本の美術品，工芸品が置かれている。

本書は，「はじめに」で「ライトの建築は日本との出会いなしには生まれなかった。ライトの時代や欧米の文化史の流れと日本との関係に注目しながら，ライトの人生を辿ってみたい」と記すように，日本文化とのかかわりを前面に出しながらライトの生涯を語る。

ライトと日本文化とのかかわりに関しては，本書以前にも谷川正巳の一連の論考があり，また，ケビン・ニュートの著作（邦訳『フランク・ロイド・ライトと日本文化』，1997年）やジュリア・ミーチの著作（2001年）がある。本書も基本的には，これらの業績の延長線上にある。近年，伊藤若冲を「発見」したアメリカ人としてひろく知られるようになったジョー・プライス氏のエピソードを加えている点で，より親しみやすくなっていると言えるかもしれない。しかし，「ライトの建築は日本との出会いなしには生まれなかった」と記すわりには，建築自体と日本文化のかかわりが詳細に分析されているわけではない。建築論ではなく，あくまでもライトの生涯を辿ることが主眼になっている。

私自身は，ライトと日本美術のかかわりに関しては，浮世絵以上に屏風絵の存在がおおきいと考えている。その理由は，ライトが屏風絵を設計の段階で組み込んでいる点，しかも，ライトの所蔵する屏風絵の多くが桃山様式を示す花鳥図であり，それはおそらくはライトの自然観とかかわっていると考えられる点にある。この見解の是非はともかく，ライトと日本美術の問題を考えるとき，従来のようにもっぱら浮世絵だけをあつかうのではなく，屏風絵も含めて，造形者としてのライトが日本の美術をどのようにみずからの建築に活かしたのかという観点から考えていく必要がある。しかし，本書にライト建築についてのそこまでの分析を求めるのは無理だろう。

本書は，あくまでも評伝として読むべきものである。その限りにおいては，その多様な様式を示すライト建築と同様に起伏のあるライトの生涯が，丁寧に，そして，魅力的に追跡されていると思う。目次からもわかるように，ライトの生涯の各段階における日本とのかかわりが言及されている。本書を通して，読者は，岡倉天心やフェノロサ，ビゲローと言った日本美術を海外に紹介した第一世代に続く第二世代の旗手としてのライトの位置を具体的に実感することができるだろう。